

G-4

一時的な全体部分関係：チェコ語の所有動詞 *mít* の場合

浅岡健志朗

kenshiro.asaoka1990@gmail.com

1. はじめに

チェコ語¹の動詞 *mít* は、所有者を主語、所有物を直接目的語とする他動詞文（所有文）²の主動詞となる、いわゆる HAVE 型動詞³である。チェコ語の所有文は、所有の中核的意味⁴である所有権関係、親族関係、全体部分関係をそれぞれ表すと同時に、属性、位置関係、ある種の規範など、これらからは逸脱する様々な関係を表す。しかし、所有文がどのような関係を表しうるか、そして、これらの関係が中核的とされる関係とどのように関わっているのかは、これまで明確にされていない⁵。本発表は、全体部分関係⁶を表す事例と、これに関わる一群の事例を分析することで、所有文が表し得る様々な関係が全体として構成するカテゴリー構造の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 全体部分関係と恒常性

所有文は、主語の指示対象（所有者）と目的語の指示対象（所有物）の間に何らかの関係が成立していることを表現する。例えば、(1a-d)の所有文は、所有者（その城、ホンザ、タイタン、その動物園）を構成する一部として所有物（美しい壁、長い脚、大気、パンダ）が存在することが表されている。

- (1) a. Ten hrad má krásn-ou zed'.
その.SG.NOM 城.SG.NOM mít.3SG.PRS 美しい-SG.ACC 壁.SG.ACC
「その城は壁が美しい」
- b. Honza má dlouh-é noh-y.
ホンザ.SG.NOM mít.3SG.PRS 長い-PL.ACC 脚-PL.ACC
「ホンザは脚が長い」
- c. Titan má atmosfér-u.
タイタン.SG.NOM mít.3SG.PRS 大気-SG.ACC
「タイタンには大気がある」

¹ 印欧語族スラヴ語派西スラヴ語群。基本語順はSVO。7つの格（主格、属格、与格、対格、呼格、前置格、造格）を持ち、主に情報構造に応じて柔軟に語順が入れ替わる。

² 主語と目的語はそれぞれ主格と対格で標示される。述語は主語の人称・数・性に一致するが、本発表のグロスでは性の表示を省略する。

³ 典型的に、HAVE 型動詞は物理的な所有を表す動詞に由来する一方で、意味変化の結果として他動性が低く、そのため受動態を作ることができない (Stassen 2009)。動詞 *mít* はこの特徴づけに当てはまる。

⁴ 所有と呼ばれる一群の関係の中で、これらが中核的とされるのは、世界の言語の中でこれら三つの関係が同じ言語形式によって表されるという明らかな傾向が見られるためである (Aikhenvald 2013)。Taylor (1996) や Langacker (2009) はこれらを所有のプロトタイプであるとしている。

⁵ チェコ語の所有を包括的に扱った先行研究として Piřha (1992) があり、主に4章で動詞 *mít* を扱っている。

⁶ ここで全体部分関係とは、「木」と「幹」のような、Wが要素P₁, P₂...から構成されていると捉えられる場合にWとP_nの間に成立する関係を指す。「木」と「柏」のような集合と成員間の関係は含まない。

d. Ta zoologická zahrada má pand-y.
 その.SG.NOM 動物園.SG.NOM mít.3SG.PRS パンダ-PL.ACC

「その動物園にはパンダがいる」

e. *Ten stůl má knih-u.
 その.SG.NOM 机.SG.NOM mít.3SG.PRS 本-SG.ACC

「その机の上には本がある」を意図。

ある対象がある対象を構成する一部であるとき、その二者間の関係を全体部分関係と呼ぶ。では、ある対象がある対象を「構成する一部」であると捉えられるためには何が必要であると言えるだろうか。ここで、(1a-d)の所有文が表す時間的な特徴に注目してみる。(1a)では、「その城」が存在している間、「美しい壁」がその一部であるという関係も成立し続けると解釈される。(1b-d)についても同様である。一方で、「その机」が存在している間、その上に「本」があるという関係が成立し続けるとはふつう解釈されないが、この関係を表すものとして(1e)の所有文は容認されない。ここで「時間軸上で、主語の指示対象が存在する範囲と、述語が表す関係が成立する範囲が重なっている程度」を「恒常性」と呼び、恒常性が高い関係を恒常的な関係、恒常性が低い関係を一時的な関係とそれぞれ呼ぶ。ある対象がある対象を「構成する一部」である（つまり全体部分関係である）として捉え、所有文で表現するためには、少なくともそれが恒常的な関係として捉えられている必要があるように見える。

(2a)は「その美容室」と「たぐさんの人」の関係を表す所有文だが、これは「その美容室に（今）たぐさんの客がいる（混んでいる）」という関係を表すものとしては容認されず、「その美容室には美容師がたぐさんいる」のように解釈される。これは、「美容室」にとって、「たぐさんの客」よりも「たぐさんの美容師」の方が恒常性が高いと捉えられることの反映であると考えられる。(3a-b)のように、「その美容室」に「たぐさんの客」が「いつも」いるという関係であれば、所有文で表現することができる。所有文で表現するための要因に恒常性が関わっていることがこれによっても確認できる。

(2) a. To kadeřnicv-í má hodně lid-í.
 その.SG.NOM 美容室-SG.NOM mít.3SG.PRS たぐさん 人-PL.GEN

「その美容室には人 {従業員/* (今) 客} がたぐさんいる」

b. Ta klinik-a má hodně zákazník-ů.
 その.SG.NOM 歯科クリニック-SG.NOM mít.3SG.PRS たぐさん 客-PL.GEN

「その歯科クリニックは { (通院している) 人が多い/* (今) たぐさん患者がいる } 」

(3) a. To kadeřnicv-í má vždycky hodně lid-í.
 その.SG.NOM 美容室-SG.NOM mít.3SG.PRS いつも たぐさん 人-PL.GEN

「その美容室にはいつも客がたぐさんいる」

b. Ta klinik-a má vždycky hodně zákazník-ů.
 その.SG.NOM 歯科クリニック-SG.NOM mít.3SG.PRS いつも たぐさん 客-PL.GEN

「その歯科クリニックはいつもたぐさん患者がいる」

3. コントロールによって動機づけられる事例

一方で、(4a) に対して (4b) の所有文が表している関係の恒常性は必ずしも高いと言えないように見えるが、それにも関わらず全く自然な文である。

- (4) a. Ta zoologická zahrada má pand-y.
 その.SG.NOM 動物園.SG.NOM mít.3SG.PRS パンダ-PL.ACC
 「その動物園にはパンダがいる」
- b. Ta zoologická zahrada má ted' pandy ale jindy ne.
 その.SG.NOM 動物園.SG.NOM mít.3SG.PRS 今 パンダ-PL.ACC しかし 別の時 NEG
 「その動物園には今パンダがいるが、いない時もあった」

(5a-c) は、恒常性の点では違いがないにも関わらず、容認性が異なる。

- (5) a. Ta zoologická zahrada včera měla pand-y.
 その.SG.NOM 動物園.SG.NOM 昨日 mít.3SG.PST パンダ-PL.ACC
 「その動物園には昨日パンダがいた」
- b. ?Ta zoologická zahrada včera měla hodně lid-í.
 その.SG.NOM 動物園.SG.NOM 昨日 mít.3SG.PST たくさん 人-PL.GEN
 「その動物園には昨日たくさん人（客）がいた」を意図
- c. *Ta zoologická zahrada včera měla hodně opic.
 その.SG.NOM 動物園.SG.NOM 昨日 mít.3SG.PST たくさん 猿-PL.GEN
 「その動物園には昨日（野生の）猿がたくさんいた」を意図

この容認性の違いは何に起因するのだろうか。これらの文が表す事態をより細かく分析してみる。(5a) が表す事態を理解するためには、主語である zoologická zahrada 「動物園」が動物を飼育する施設の一種であること、様々な種類の動物を収集、飼育、管理し、一般に公開していること、これの運営には動物の飼育員を含む職員が関わっていること、来園客は入園料を支払って動物を見学することなどを始めとして、様々な一般的知識が必要であると考えられる。(5a) はこれらの知識をもとに、ふつう、「その動物園では、昨日の時点で、複数のパンダを飼育、管理、公開していた」のように解釈される。具体的には、複数のパンダを飼育、管理、公開していたのは、動物園の運営に関わる不特定の職員であり、これら不特定の人間がパンダの状態や位置を変化させることができた（公開するかどうかを選択したり、必要に応じて屋外の放飼場から屋内の飼育室に移動させるなどできた）のように解釈されるだろう。つまり、「ある参加者が他の参加者に対して能動的に働きかけ変化をもたらすことができるという関係」が成立している。この関係をコントロール⁷と呼ぶ。

⁷ これは、次に示す Langacker (2009: 83-84) による control の概念のうち、本発表の内容に特に関わる部分を簡潔な形で表したものである。

In prototypical instances of possession, the possessor (R) actively controls the possessed (T) in some manner –physically, socially, or experientially. The flip side of R controlling T is that R has an exclusive privilege of access to T. In the case of ownership (e.g. my pen), R manipulates T, determines where T is kept, and can use T whenever desired. This control also has social and experiential components. Others acknowledge these privileges. Moreover, R knows where T is and determines whether others can use it.

- (6) Mám ted' v ruce hrnek.
 mít.1SG.PRS 今 中 手.SG.LOC カップ.SG.ACC

「私は今、手にカップを持っている」

例えば、(6)のように所有者が人間であり、かつ所有物が無生物の具体物である場合には、通常、所有者の所有物に対するコントロールが成立していると解釈される。コントロールは、典型的な所有権関係という所有の中核的意味の特徴のひとつであり、所有文が表すカテゴリー全体の分析に必要な概念である。(6)がふつう一時的な関係であると解釈されることから分かるように、コントロールが成立していれば、一時的な関係であっても所有文で表現することができる場合がある。

つまり、(5a)は所有者である（動物園の運営に関わる）不特定の人間の、「パンダ」に対するコントロールが成立していることを表していると言える。このようにコントロールが成立する関係として捉えられることが、(5a)を所有文で表現する動機づけになっているということである。言い換えれば、(5a)は所有権関係の一種であるとみることができる⁸。

(5a-c)の容認性がこの順で低くなるのは、動物園の運営に関わる不特定の人間と目的語指示対象（それぞれ「来園客」と「野生の猿」）に対するコントロールを（少なくとも飼育する動物と同じようには）認めることが困難になるからであると考えられる。

また、(5a)が自然な文であるのに対して(7)は容認されないが、これは「動物園」の場合と比べ、「この森」に関わる不特定の人間を想起し難いためと考えられる。このことも、(5a)の所有者が「動物園」の意味のうちに含まれる人間であることを示している。

- (7) *Tento les včera měla pand-y.
 この.SG.NOM 森.SG.NOM 昨日 mít.3SG.PRS パンダ-PL.ACC

「この森には昨日パンダがいた」を意図

4. 一時的でかつコントロールのない関係

4.1. 場所表現を含む場合

また、一時的で、所有者が無生物であるためコントロールが成立しているとは解釈できないにも関わらず所有文で表現することができる場合として、文中に副詞句の場所表現を含む場合が挙げられる(11a-b)。

- (8) a. Ta mikin-a *(tu) má prach.
 その.SG.NOM パーカー-SG.NOM ここに mít.3SG.PRS ほこり.SG.ACC

「そのパーカーは（ここに）ほこりがついている」

- b. Ten strom *(tam) má balón.
 その.SG.NOM 木.SG.NOM そこに mít.3SG.PRS 風船.SG.ACC

「その木は（あそこに）風船が引っかかっている」

⁸ただし、少なくとも、特定の個人ではなく不特定複数の人間が所有者であるという点で、典型的な所有権関係からは逸脱している。

コントロールのない一時的な関係で場所の限定がないと不自然になるのは、主語指示対象が人間の場合も同様である。(12)は例えば公園のベンチに座っているときに目の前にハトが集まっている様子を電話で誰かに伝えている文脈で自然な表現である。この文から場所表現 *tu* 「ここに」を取ると容認性が下がる。これは、一時的でコントロールを伴わない関係を表す所有文が、主として所有物の存在する位置を示す機能を果たしている、言い換えれば存在文が表す意味に接近しているためであると考えられる(浅岡 2017a)。

- (9) *Má-m * (tu) hodně holub-ů.*
mít-1SG.PRS ここに たくさん ハト-PL.GEN
 「(ここに) たくさんハトがいるんだ」

4.2. 対比の文脈の場合

さらに、一時的でコントロールが認められない関係で、かつ場所の限定がなくとも、主語指示対象を他の対象と対比する文脈であれば所有文が容認される場合がある。

- (10) a. *Tento stůl má knih-u *(a*
 この.SG.NOM 机.SG.NOM *mít.3SG.PRS* 本-SG.ACC そして
- tam ten druh-ý stůl má hrnek).*
 そこ その.SG.NOM 別の-SG.NOM 机.SG.NOM *mít.3SG.PRS* カップ.SG.ACC
 「この机は本が載っていて、そっちの机にはカップが載っている」
- b. *Tento ostrov včera měl čtyřicet tučňák-ů,*
 この.SG.NOM 島.SG.NOM 昨日 *mít.PST.SG* 四十.ACC ペンギン.PL.GEN
- *(a dnes už ne-má ani jedno-ho).*
 そして 今日 もう NEG-*mít.PST.SG* さえ 一-SG.ACC
 「(複数ある島のうち) この島には昨日ペンギンが四十羽いたが、今日はもう一羽もない」

(10)の先行節単独では、「この机」の上に「本」があるという関係を表す表現として容認されないが、「その机」の上に「カップ」があるという関係を表す節が後続すると自然な表現になる。

この振る舞いには、全体部分関係を表す所有文に、主語の指示対象がどのような特徴を持つのかを、述語が表す関係によって描写するという機能がある(部分がどんなものであるかを示すことによって、その全体がどんなものであるかを示すことにもなる)ことに動機づけられていると考えることができるだろう。例えば(1a-d)は、「美しい壁」「長い脚」「大気」「パンダ」がある／いるということによって、それぞれ「その城」「ホンザ」「タイタン」「その動物園」の特徴が描写されていると考えることができる。

ここで「特徴が描写される」とは具体的にどういうことか。言い換えれば、どうすれば所有文の主語が表す所有者がどのようなものであるかが示されたことになるのか。これに関わっていると考えられるのが、特徴が描写される対象が何らかの対象の一種であるという知識である。例えば(1a)では「その城」が「城」の一種であるという知識を前提として、「城」の一種であるような他の対象から、「美しい壁」と恒常的な関係を持っているということによって「その城」が区別されることが示されていると考えることができる。(1a)から「美しい」を取った場合には容認性が下がるが、これは単に「壁があ

る」ことによっては「その城」を他の「城」から区別する特徴を述べたことにならないということを示していると言える。同様に、(1b)では「ホンザ」が「人間」の一種であるという知識を前提として、「人間」の一種であるような他の対象から、「長い脚」と恒常的な関係を持っているということによって「ホンザ」が区別されるということが示されている。そもそも「長い脚」というのは、他の人間と対比してのことであり、他の人間との対比がなければ、「長い」ということに意味を与えることができない。つまり、ここで「特徴が描写される」こととは、同じ種に属する他の対象から区別するのに必要な情報が与えられることであると言える。(1a-d)のような恒常的な関係に対して、(1e)が表す「本がある」のような一時的な関係では、「その机」が持つ時間的に安定した特徴を描写することはできない(本があつたりなかつたりするという事だけでは、この特定の机を他の机から区別できない)。これが(1e)の容認性が低い理由であると考えられる。

一方で、(10a-b)のような対比の文脈においては、一時的な関係しか持たない対象によって、主語の指示対象がどのような対象であることを示す機能を果たしうる。これは、主語の指示対象を、同じ種に属する他のあらゆる対象から区別するのではなく、その文脈において対比されている対象と区別することさえできれば、問題の対象の特徴を描写したことになるからであると考えられる。つまり、その特定の文脈において対比されている他の机と何が違うかだけを述べれば、その特定の机がどのような机であることを述べたことになる。これに動機づけられて、(12a-b)のような所有文が成立していると言えるだろう。

5. 結語

二者間の関係を全体部分関係として捉え、所有文で表現することには、それが恒常的な関係であるという要因が関わっている。本発表では、一時的な関係であるにも関わらず所有文で表現される場合の動機づけについて検討した。この中には、それがコントロールを含む関係であるということによって動機づけられているもの、位置関係を示すという機能によって動機づけられているもの、主語の指示対象を対比される他の対象と区別するという機能によって動機づけられているものがある。

コントロールを含む事例に関して、例えば(4a)のような事例は恒常的でありコントロールを含む関係を表していると言える。つまり、このような事例は所有文が表す関係のカテゴリー全体の中で、全体部分関係と所有権関係が重なる部分に位置づけることができる。

参考文献

- Aikhenvald, Y. Alexandra. (2013). Possession and ownership: a cross linguistic perspective. In Aikhenvald, Y. Alexandra and Dixon, R. M. W. eds., *Possession and Ownership*. Oxford: Oxford University Press.
- 浅岡健志朗 (2017a) 「チェコ語の所有動詞 *mít* が表す所有権関係と存在」『東京大学言語学論集』東京大学, 第38号.
- 浅岡健志朗 (2017b) 「チェコ語の所有文と存在文が表す全体部分関係」『日本言語学会154回大会予稿集』日本言語学会.
- Langacker, Ronald W. (2009). *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Pitřha, Petr. (1992). *Posesivní vztah v češtině*. Praha: AVED.
- Stassen, Leon. (2009). *Predicative Possession*. New York: Oxford University Press.
- Taylor, John R. (1996). *Possessives in English: An Exploration in Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press/Clarendon.